徳島新聞　２０２３年（令和５年）７月２２日　土曜日（１７）スポーツ掲載
徳島新聞社提供

生光学園 七回に猛攻

城北、満塁の好機つぶす

▽2回戦（第2試合）

生光学園	0	0	0	1	0	0	8		9
城北	0	0	0	0	0	0	0		0

（七回コールドゲーム）

【評】生光学園が後半一挙に8点を奪って、この回、打者14人の猛攻で一挙8点を奪った。先発大山が6回を無失点にしのいだ。城北は左腕飯田が六回表まで1点に抑えたが、その裏の無死満塁のチャンスをつぶしたのが痛かった。

きょうの試合
◇鳴門オロナミンC球場
▽準々決勝　鳴門一名西（10時）
▽徳島商川島（13時半）

城北対生光学園　7回表、生光学園1死三塁、今西が中前打を放ち2―0とする＝鳴門オロナミンC球場（立花善晴撮影）

磨いたチーム力発揮

生光学園 8強出そろう

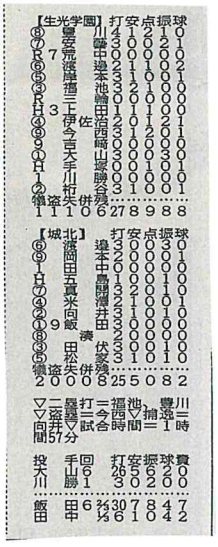
試合の流れを決めたのは1―0で迎えた六回裏、6番からの下位打線に冷静だった。生光学園の守りだった。ポテンヒット2本とバント安打で無死満塁のピンチを迎えた。エース川勝に代わって先発した右腕大山は「決して打たれているわけではない」と大きな当たりはないと踏んだベンチは前進守備を指示した。大山は130㌔台後半の直球で押し、6、7番は内角球を詰まらせ三ゴロで本塁アウト。8番は外角球で一ゴロに仕留めた。

本格派右腕の川勝が成長し、失点が計算できるようになった今春以降、チームは守備に力を入れてきた。二つの三ゴロを落ち着いて処理した岸本主将は「練習の成果を出せた」と声を弾ませた。

続く七回表、二塁打で出た先頭福池の代走三輪が犠打で三進。ゴロなら打った瞬間に三塁走者がスタートする「ゴロゴー」のサインが出る中、打者今西がたたきつけた打球は遊撃手の頭を越え、俊足の三輪は生還。幸島監督は「内野のどこにゴロが飛んでも三輪はホームインできていた」と好スタートを褒めた。

最終七回は川勝が締めて完封リレー。昨秋は背番号1を付けた大山は春先は130㌔程度だった球速が138㌔に伸びた。「同じ2年の川勝と刺激し合っている。次も出番があれば抑える」。2枚看板の投手力、堅守、機動力。チームカラーを前面に押し出した1勝となった。

（木村恭明）



第8日の成績

▷2回戦

鳴門渦潮	12―2	板野
生光学園	9―0	城北

第105回 全国高校野球選手権 徳島大会　第8日

高校野球の第105回全国選手権徳島大会第８日は21日、鳴門オロナミンＣ球場で２回戦の残り２試合が行われ、ベスト８が出そろった。第４シードの鳴門渦潮が12―２で板野に五回コールド勝ちし、生光学園は９―０で城北を七回コールドで破った。第９日の22日は、同球場で準々決勝２試合が行われる。